

小 さ き 詰 石

鯉 城 生

▽ △

思ふこと言はねば腹ふくるゝとか、けれども私の胸には
今差當り腹の脹れる程の思ひが問へて居る譯ではない、元
より深い蘊蓄があらう筈もなく、又大した不平も持ち合せ
ぬから、元來濱の真砂の其の一粒程にも世に顧みられぬ又
其れ丈の價値しかない私にとつては、寧ろ物言へば唇寒し
秋の風の方で、あたち口に風をひかさないう方が賢明なやり
方かも知れぬ。雉も鳴かずば撃たれまいものを、黙つて居
れば人は唯イカメシイ髮面の叔父さんだ位に見過さすの
に、つまらぬことを言つたり書いたり無識無能を曝け出し、

却つて人の嘲笑を招き侮りを受けるのが關の山、溫和しく
してござれ、と忠告して呉れた人もある。がそれではあま
りに利口過ぎる、私は今此處にチトばかり徳富蘆花氏の
「五分時の夢」を拜借する。

▽ △

吾不才を悲しみ、人の才を羨み、平凡羅鯉の生涯に倦み、
日も夜も紙を展べ筆を舐りてはつくる反古もて飽くことな
き暗黒の腹を養ふ忌々しさに、或夜燈火に筆を折つて斯く
祈りぬ。「吾は生くるを欲せず、平凡に倦みぬ、求めて得ざ
る才を追ふに倦み果てぬ、爾吾を生かさむと欲せば吾を平

凡より救へ、吾を平凡に安んぜしめむとならば何ぞ吾に自己の平凡を見せしむるや、吾は生くるを欲せず」

頭は懊惱に低れて、精神や、恍惚。忽焉、光れる者吾側に立ちたれば、室の内眞晝よりも白くなりぬ。吾をのゝきて云ふ「誰ぞ、爾は？」汝が祈吾耳に達せり、吾汝に諭さむ、吾と共に來れ」と光れる者宣ふ。

飄忽として吾等は大なる野に立ちぬ。百花の野に立ちぬ。花として在らざるなく、香として具はらざるなし。光れる者蟻の眼よりも細き一個の花をとり、問ひ玉はく、「何ぞ」

「苔の花なり」汝、耳傾けて此花の言を聞け、牡丹ならざるが故に肯て開かずと云ふや」吾答ふ。「主よ、否、然れども余は無心の花たる能はざるなり」主宣ふ。「來れ」

中略——斯様にして彼は次に森の梢に導かれ群鳥の中に雀を指し示されて、余は無智の鳥たる能はずと拒み、南の天の下では上帝の塵き降した星を指示されたが、小さき星の運命をもて満足する能はずと拒んだ、彼は更に導かれた——。

飄々として吾等は虚を踏み、空を渡り天より天に上り、天より天に上り、無邊の天に上り、空を横ぎる時の橋に立ちぬ。唯見る、石壁無邊際の際より立つて無邊際の際に達す。壁の石、色としてあらざるなく、形としてあらざるなし。個々別々なるが如く、また唯一なるが如し。余問ふ。「主よ是れ何の壁ぞ」主答へ玉ふ。「吾天國の城壁なり」一の小石を指して宣はく、「汝に力を與ふ、其石を抽きて見よ」主よ、否、彼小なる石を抽かば、大なる城壁崩るべし」近くよつてよく見よと宣ひければ、進みて彼小石の面を見るに見よ、其石に鑄られたるは吾名なり。吾胸轟きぬ主宣ふ。「汝見たりや、吾城壁を築くもの盡く吾石なり、大小となく、美醜なし、其一を缺く可からず——汝は満足せりや」茫然として吾涙落ちぬ。主與然り」

「汝の地に歸れ」と彼時の橋より擠し玉ふに、呀と叫びて己を狭き書齋に見出しぬ。頬には猶涙あり。(以下略)



小石、詰石、洵に私はこの小さき詰石である。自ら悔り拱手して引込思案に日を銷すことは罰當りだ、詰石なればこそ賤微不才の身を以て國務に奉じ、官の録を食んで居るのである。眞砂在つて車輟も蛤も海に棲息する、人の食膳にも上ることになる、青松も白砂を副へてこそ一入美しい。以て三景の一としての天橋も成り立つ。大も小も高きも低きも、硬軟粘脆陰陽黑白貴賤賢愚、森羅萬象は悉く宇宙進化の擧揚的力素でないものはない、私も盧花氏のそれに似た夢を見たことがある。が天帝に導かれて最後に虹の橋上に立ち其の擠し落される瞬間に訓へられた言葉は「諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂」の四句一偈であつた。「生滅々已寂滅爲樂」の語を故事熟語大辭典などには「人は死して後始めて眞の樂を得るをいふ」と註してあるが、吾等の實在の社會生活を離れて此世を單に浮世なり汚濁の世とし、後世に於てのみ眞實の世界眞の樂しみを求め得るとするならば宗教は此の世に於て無要である。此の地上に確かりと立ち實在の社會生活に即して之と離れず、之

を延長した永遠の生命と無限の祝福こそ日常私共の祈りであり亦神佛の希望である。この愛する肉身を投げ出し眞理の御前に捧げた所に佛の生活が出来、眞實の生命は湧くといふのがこの半偈の包容する意味である。即ち此身の受けた天地の力のまゝに粉骨碎身する所に眞實の生活はあるのである。天國の無邊際の際壁の小さき詰石も生滅々已寂滅爲樂の二句も結局異形同意である。此の自覺あつて始めて一國の宰相となつては貴院樞府と御機嫌をとつたり氣兼ねをしなくても、攻撃の矢面に立ち四面楚歌の聲の中に在つて斷乎として其の所信を主張し敢行し得る。工場の機關室に籠り一火夫として楽しんで終生を送ることも出来、刀筆の吏に甘んじて一生をも捧げ、又こんなことをも厚がましく書き得るのである。自らを潔くする爲に無爲にして事勿れ主義を持つことは男子の本懐ではない、毀譽褒貶は人の心々に任せよう。

一寸の蟲にも五分の魂、五感も人並に備つてゐる（其の中でも低い鼻ではあるが臭覺は十人並以上に鋭敏だ）私に

は一寸位の魂はある筈、此頃の空つ風には寒いと思ひ、喉も痛み郊外の霜解け道の悪るさには砂利を布いたらと思ふ位な感じはある。詰石の自覺に立脚する限り、思ふ所は之を叙べ、感ずる所は人に訴へ、爲すべきことは敢て行ふのが此世に生を受けた私共の務め、斯様な考へから生れ出たのがこの草稿である。



吉野櫻の花の雲も美しいが若緑の野山を點綴する山櫻にも捨て難い風情はある。横綱大關の角力の偉觀は幕下小角力あつての後に味はれる、滋養に富んでゐるからとて珍魚佳肉ばかり食べてゐては胃の腑に悪い。要するに私は幕下力士の小角力をお目にかけて大角力の興を副へ、食慾増進の爲に野菜類を食膳にお供へしようとするに外ならぬ。さりとて豫め番組や献立が調つてゐるのではなく、統一した筋書は何もないのである。題して「小さき詰石」としたがほんのうめ草で一種の雜觀である。或は道路法の城にたて

籠つて法敵の征矢を防ぎ、時には城門を八文字に開いて雲霞と寄せる敵の只中に切り入ることもあらう。或は衆望を負ふて庶民の後援の下に道路法の城門に弓をひく場合もあらう。義氣に感ずれば敵將を賞へるに吝かでもなく、軍紀を紊り士氣を沮喪する者があれば味方の首を刎ねることをも辭するものではない。——チト吹きすぎましたかな——兎も角主として道路行政に關する感想を機に觸れ事に隨ひ思ひ浮ぶがまゝに綴り合せ書き連ねて見ようとするのである。色々と御叱正を賜はらば此上の幸はない、五回も續くか、三度で止すか、濱の眞砂に類ふべきこの身は磯なれ松吹く晨の風と、磯打つ波の心のまゝに身を任せて。そうです、道學者めいて詰石の自覺のと云ふても、雪折竹に本來の面目を悟る程の眼を持たぬ私、どうせ身動きも出来ぬ詰石の世迷ひ言、小角力を見せた積りなのが街の四つ角の旋風に躍る塵藁であつたり、折角培つた青物は日蔭の藪草だつたりするでせう。龍頭蛇尾に終れば未だしも本望、蛇頭蚰尾を全ふすることもチと六ヶ敷い。

あれからもう一年近くになる、白梅は大方散り果て、未だ桃躑躅には少し早く、獨り紅梅が淡い霞の野中にニッコリと紅い唇に媚びをたゞへてゐる早春の或夜のこと。Kは所謂京津國道沿ひ京都市蹴上の水源池近くに屹立してゐる都ホテルの階上の一室に、湯上りのホテルとスチームの熱氣とで廣い額一パイに汗の玉を縋らせて寢臺の上にグツタリと横たはつてゐた。Kは主として御大典に關係ある道路視察の爲此地方に出張中の丹羽内務書記官に隨行して、其の第一日の行程を了へて今しこのホテルに足を伸ばしてゐるのである。今朝着京京都驛階上の八軒の食堂で朝食を喫して直ぐに自動車であちこちと駆けずり廻つて視察した一日中の見聞事項をとつておいつ考へてゐたのも束の間、いつか靈は幽冥の境を彷徨し夢は早平安京の歴史の蹟を追ふてゐた。それから幾時間経つたか、呑氣なKもさすがに隨行たるの身分を忘れず、ふと耳に入つた自動車の警笛に眼を

覺まし、やおら身を起して時計を見れば午前五時に二十分前、未だ空には星が明滅して東山は黒く花洛の夜を靜かに眠りに耽り、朝靄は地を逼ふて街も廓も寺も森もボーツと夢の様、先の自動車の爆音が消えての後は加茂川のせまらぎさへ聞える靜けさ、知恩院の曉の鐘の音も未だ響かぬ、チト早すぎたもう一時間ばかりと復床の中に潜り込んだ、一夜十圓の部屋代にさもしい心を起して眠りを貪つたわけではないが、朝早く女中が火をいれに來るではなし室の暖かさと床の寢心地のよさについぐつすり寢こんで、再び眼を覺ました時は陽の光りが眩しく窓に照り映えて時計の針は正に八時を示す。兎ではないが寢過ぎして驚き慌てゝも早後の祭り、寢卷のまゝ湯殿に入つて齒ブラシを使つてゐるとドアをノックする者がある、ボーイだなと思つて湯殿の中からお入りと聲をかけるとユツタリした足音、何處に居るんだとの聲は隨に丹羽書記官、湯殿ですと應へて大急ぎで嗽いで出て見ると、既に服裝を整へK君食堂に行かうではないかとのお言葉、ハイ未だ顔も洗つてゐません。あ

まり靜かで寢心地が良かったものですからツイ寢過ぎてしましたと大に恐縮して居ると、ア—そうかそれはよかつたねえ。では先に行つてから後から來給へと優しい御挨拶、もう食事もお濟みだらうと思ひながら後から食堂に行つて見ると、わざと緩りと食事をしながら待つて居て下さる様子、ハ、——自分がホテルには餘り慣れてないから態々案内に來て下さつたのだつたなと氣附いた。今時本省の書記官で隨行に威張る様な人は殆んどない、併しこんな場合に善通の人だつたら、随分香氣なものだねえ、もう八時過ぎだぜ、位な嫌味は口に出ないとも限らぬ。Kはこの時ふと八代將軍徳川吉宗公の名君振りを思ひ合して陰に恐縮もし其の御眞情を有り難いものに思つた。それは吉宗公が何處かへお成りの時の事、其の腰物筒を持つて居た御徒士の某が兩國橋の船着場で誤つて大切な腰物筒を石の上に取り落し大きな鱒をいらした。從來こんな粗相をした者は死罪に行はれる先例であつた。だから本人は元より打首かさなくば切腹を覺悟して居り、御徒士頭も之を不憫に思ひながら

上役を経て事の次第を言上した。吉宗公は委細を聽くと丁と膝を打ち、ア、あれか其の事なら余は船中から始終を見届けてゐた、あの徒士の者は取り落したのではない石に躓いて轉んだのぢや、そして御生大事にあの品を離さず持つて居たので却つて鱒が入つたのぢや、物を大切にする愛しい奴ち差許してやれ。と云つたといふのである。こんな粗相位で首をチョン斬るなど甚だ不當であること云ふまでもないが、十年前には廊下で缺禮したといふので屬官の首を切つた知事があつた程だ、武將諸大名は專横を極め部下や町民の首を斬ることを茄子を切る位に心得て居た彼の時代に於てこの取裁きは、仁といはうか寛大といふべきが兎に角思ひ遣りの深い人間味のある天晴名君ではあつた。こんな古事まで思ひ出させる親しみ深い情味のある丹羽書記官は現に土木局の道路課長である。勿論時には大に皮肉も口を衝いて出で舌鋒當るべからざる時もあり、一寸見には寄り添ひ難く平常例のアーウムの態度に變りはないが、其の優しい眞情は前述の例を俟つまでもなく日常の行爲に顯

れて見える。其の頭腦の明晰なことは日夕氏に近接する人の間に於て定評であるばかりでなく、本誌上に於ける時折の所論に依つて窺はれ、平素僕は法律はあまり好きではないと云つて居られる口の下から、這般の現代法學全集第八卷にあんな素晴らしい道路法の著述が生れ出たのでも知れる。頭腦は透徹して居ても冷淡ではない、人情味たつぷりでも條理を尊び果斷であるから情實に墮することはない、議論はお好きらしいが法規のみ循にとり理屈一點ばりの役人氣質で仕事をすることは世間の實情に適しないから駄目だと仰しやる、道路行政は此實此調子で行はれるものと見てよからう。だから内部的には信望があり部下からは力強く思はれ、外部的には物判りの良い公平な行政官として信頼の厚いことは多數讀者の實感せられて居る所である。あまり謙辭ばかり呈したが氏も神ならぬ身だ多少の缺點はあるだろうが、絶えて人から氏の陰言を聞いたことがない。けれども無くして七癖といふから癖の一つや二つはありそうなものだ、私の知つてるのは先づ歩き風位なもの、例の演

説口調と歩調を一にし、肩に力を入れて一歩々々大地を踏みしめ、丁度夜嵐に落ち散つた銀杏を靴の踵で踏み潰してゝも進む様な足取りだ。誤樂にも一通りは手を染められた様だが不幸にして未だズバ抜けた御手並を拜見したことはない。碁も將碁もマァー。趣味としては讀書の外に繪も書もお好きらしい、但し書く方ではなくて見る方のこと、觀ること、云へば芝居の歌舞伎は通の域まで進んで居られる、歌に至つては未だ嘗て宴會場でも其の妙へなる美音をうかつたことがない、人の歌ふのは笑つて聞いて居られる所を見ると嫌ではなさそうだ、先づ聴き手の方が、でも最近御機嫌のよい時に靜かに謠曲を唸つて居られるのを私かに聞いたと報告した人がある。若い時には多少運動もやられたそうだが、才子多病の例へあまり頑健の方ではない。それに課長室は北向で四六時中太陽が見舞ふことがないので色は愈白い、折角近頃ゴルフを始められたと聞いて氏の健康の爲に陰かに喜んで居る。が未だ他人と妙技を爭ふまでには距離があるらしい。



省内雀の噂さによると氏も此處半歳を待たないで御榮轉だろうと云つて居る。元より何れ時の問題ではあるけれども、道路課から氏を失ふことは道路行政の愈重大緊要さを加へた今日非常な痛手であり、全員を擧げて今から惜しんで居る。氏一個人としては久しく現狀に留まられることは或は迷惑かも知れぬが、道路改良費の増額並産業道路費も開會中の帝國議會に豫算提案中であり、之が議決を見るのも眞近のことだから、どうかゴルフも上達し他人と妙技を闘はし得るようになられるまで踏み留まられて、議決豫算に依つて道路改良の助勢を巧みに鹽梅され、其の實績を擧げて廣く上下一般に道路改良の効果を示し、以て産業の隆興文化の進展の爲に道路改良助勢政策の基礎を鞏固にし、更に一段の進出擴張を圖らるゝ様に切望して止まない。

私はこゝには人物月旦を試みるのが目的ではない。唯氏は専ら我國の道路行政に携はつて居られる人だから、先づ其の風格の一端を御紹介申上たに過ぎない。

◎ 産業道路費豫算の問答

小川郷太郎先生。一月二十三日の議會で得意の演説(講演)をされ、産業道路の補助費の如きは十ヶ年間六千萬圓の補助を明年度僅に二百万圓を計上して、積極政策としての額を立て……が、る財政計畫は後年度の財政計畫を何等顧慮してゐないことは明瞭である、政友會の積極政策遂行に焦慮し將來の財政計畫を考慮に入れない豫算の編制を爲すは藏相の大責任である。……

路政僧。先生判りました、たつた二百万圓では私の氣も承知しませぬ、もつと澤山に出して下さい、併し遣り繰が出来ないでしやう、大學生に講義するのは夫れで十分でしやうが現ナマ問題は法螺では済みません、後年度の歳計表に載つてないと仰しやるが、良く見て下さい繼續費豫算ではありませぬ、憲政會内閣時代のやうに總額タツタ三百五十萬圓なら載せることが出来ます、明年は總て六百五十萬圓です、昭和五年度になつたら又其の時の風が吹くのです、貧弱なりと雖六七百萬圓位の歳出はド！でもなるのです、夫れが出来なければ藏相の大責任である……。

判つた人は早く手を擧げる……。